

論文審査の要旨

報告番号	総論第 30 号	学位申請者	丹羽 さよ子
審査委員	主査	高嶋 博	学位
	副査	有田 和徳	副査
	副査	坂本 泰二	副査
			博士 (医学)
			久保田 龍二
			橋口 照人

Prevalence and association of visual functional deficits with lesion characteristics and functional neurological deficits in patients with stroke

(脳卒中患者における視機能障害の発生率と病巣特性、機能的な神経障害との関係)

視覚は人の環境適応能力において重要な役割を果たしている。脳卒中患者にとって視機能障害は日常生活やリハビリテーションにおいて転倒などのリスク要因と考えられるが、詳細な視機能の実態を調査した研究はほとんどない。そこで学位申請者らは脳卒中患者の静止視力に加えて動体視力や深視力、夜間視力、眼球運動、瞬間視を測定し、左右の病巣側や脳卒中後の機能的な神経障害との関係を検討した。

対象はKリハビリテーションセンターに入院中の脳卒中患者で静止視力の測定が可能、かつ認知機能検査が実施可能な40名(患者群)と、地域在住の健常者321名(対照群)とした。これらの被験者に対して静止視力や縦方向動体視力、横方向動体視力(左→右)、深視力、夜間視力、眼球運動、瞬間視を専用の検査機器(興和株式会社)を用いて測定した。前頭葉機能障害の程度はTrail Making Test Part A(TMT-A)検査にて評価した。年齢や性別、病巣側および半盲、半側空間無視、眼球運動障害の有無はカルテから情報を得た。そして患者群と対照群の視機能の差を解析すると共に、視機能障害と病巣側および機能的な神経障害との関係を、年齢、静止視力、性別を調整変数とした多重ロジスティック回帰分析により解析した。

その結果、本研究で以下の知見が明らかにされた。

- 1) 患者群において、静止視力や縦方向動体視力、横方向動体視力、深視力、夜間視力、眼球運動、瞬間視は対照群より低下していた。
- 2) TMT-Aの低下は横方向動体視力、深視力、夜間視力の障害と有意な関連を認めた。
- 3) 半側空間無視は横方向動体視力、深視力の障害と有意な関連を認めた。
- 4) 眼球運動障害は深視力障害と有意な関連を認めた。
- 5) 左半球障害は右半球障害より横方向動体視力障害と有意な関連を認めた。
- 6) 右半球障害は左半球障害より深視力障害と有意な関連を認めた。
- 7) 夜間視力障害は病巣側と有意な関連を認めなかった。

脳卒中患者の詳細な視機能測定は身体機能や高次脳機能などの障害のため容易に実施し難く、視力障害は見落とされやすい。本研究は、脳卒中患者の動体視力等が低下している実態を明らかにした点および脳卒中後の機能的な神経障害や病巣側を視力障害の予測因子として活用できることを明らかにした点に意義がある。またこれらの知見は今後、脳卒中患者のリハビリテーションやケアのみならず、日常生活や社会生活において転倒事故防止などQOL向上への応用が期待される。よって本研究は学位論文として十分な価値を有するものと判定した。